

# 青い墓

## 「声」をもつ詩人吉原幸子

連載第一回 全四回

### クリハラ再

十はじめるまえに

ひとつのものをふたつの声

私は翔ぶ、何度でも。傷痕は鳥を求めたことの、その証。証などは求めていない。私は鳥を求めている。時は来ない。やってくるのは、そう、死だけ。その心にもう鳥はいない。私の心は鳥になれないこと、私が鳥になれないことも知っている。私が鳥になれないことこそ、鳥が生きていることの、証だから。鳥が生きているところの場所を知りたいのだ。たとえこれが墮ち続けることであつたとしても、それでもいい。私は鳥を求めている。私は鳥を生かしたいのだ。時は来る。その時、もし私が生きていなくても、それでもいい。私は鳥を求めている。鳥が真に生きることなのだ。

吉原幸子と長澤延子がおなじ魂をもつものであること、それは、この現実の世界では得難いものを真に感じ、求めてしまふ魂である、ということだと思ひます。…正直に言えば、私は初め、吉原幸子と長澤延子がおなじ魂をもつものであると思つことに抵抗がありました。私はここに、私にもわかり得ることしか書けません。だから私のわかり得たことが吉原幸子のすべてだなどということとは決して思ひませんが、今の私にとってはすべてです。

十詩集『昼顔』、そして『オンディーヌ』

吉原の言葉は、深淵をつつす闇の鏡となり私の前に立ち上がる。素通りしたつてよさそうなものだが、それができない。できない、というその最大の碑となつてゐるのが、詩集『昼顔』だと思つ。

詩集『昼顔』は一九七三年刊、詩集『オンディーヌ』は一九七二年刊、詩人中期の詩集であるこの二冊の詩集のテーマを一言でいえば、それは「愛」です。この二つの詩集は、あたかも一つのコインの裏おもてのように対照的で不

可分なものです。

それは不思議にも『昼顔』の方から得た思ひでした。私はケツセル『昼顔』にまつわる吉原の言葉を、全くもつて、誤解してゐたのだつた、そして誤解の結果を拒絶してゐたのだつた、しかし、吉原が書いたのは、そのことではなかつたのです。つまり、肉に忠実であることとその結果としての汚濁、それによつて、心の愛の純度にも忠実であることを保てることと知り、そのことに生きる望みを見いだした、ということに帰結したのではなかつたということなんです。肉、心はどちらも切り離すことのできない私という女からくる同根のものであり、こんなに、肉が汚濁にまみれてもまだ、心が死ぬということがない、という事実、どうしようもなく純粹な愛を思う、心は死なないということを実感をもつて確認できたということではないでしょうか。

私が誤解してゐたこと、そう、それは吉原が『昼顔』を生きてゐたのではないということ。吉原の立場が、『昼顔』後から、『昼顔』を語つてゐるといふことです。『昼顔』後とは、ピエールの手が自分へとさしのべられ、そしてそれに堪えられなかつたセヴリーヌが全てを告白し、物語をおえた、その後のことです。

十純粹

何よりもまず、純粹という言葉の使われ方に私は翻弄されてしまつたので、混同しないようにひとまずそれを分けておきたいと思ひます。

一つには、心も肉体も混じりけなく存在そのものから純粹な、純粹存在。

二つめは、なにもものにも理解されない、なにもものからも遠く、なにもものにもその実体をとらえられない、なにもものによつても犯されない心の純粹。純粹な愛を知つてゐる心そのものをも含みます。

三つめは、善悪の彼岸にある本能に忠実な行動のことをさした純粹衝動。

それぞれの属するところも、ちがいます。純粹存在は、生身の人たちが生きる現実ではない「永遠の場所」に属します。絶対の愛もここに属してゐます。なにもものにも犯されない心の純粹は、生身の肉体もつ私がもつてゐる心に属してゐるもので、「永遠の場所」に属してゐる絶対の愛を知つてゐる心も、ここに属してゐます。もつと言へば、この心とは、「女性の肉体」に属してゐるものです。

純粹衝動は命もつものもつ「本能」の世界に属してゐます。ただし、先の二つの純粹とは根本的に質が違ひます。それは、人の心が介入しなくても存在する世界に属してゐる純粹のことであるからです。

十『昼顔』と『オンディーヌ』

……一つのテーマ、心と肉

心だけで生きること、どうしたらそれは可能なのでしょう。それは、人を愛する前の水の精オンディーヌ、そして、ハムレットの愛を信じ切れない心を中心から支える強さもつ愛をたてることになつた、生命を宿さないほど透明な水の心の持ち主オフィーリア、彼女たちのような純粹存在であることですが、果たせないものです。人として生まれた以上、心だけで生きることが不可能ならば、心と肉の完全なる一致は、どうしたら可能なのでしょう。それは、アンチゴーヌのようにこの世ではない生を生きることを選択すること、つまり、肉も心もどちらもゆずれない究極の一致としての死を選ぶこと。心と肉の完全なる一致をもし完結するとしたなら、きつとこの道しかないのだらう。…と今は言ひます。

ケツセルの描いた『昼顔』におけるセヴリーヌの行動とは、この二つの道が自分にはないとわかつたうえで、心と肉とが、どうにも重なり合ひないということをどうしたらいいか、もう一つの道の模索だつたのだらう。

蛇足かも知れない補足をすると、この心と肉とは、「人間」と「女性」のことではありませぬ。この心は「人間」のものであると思つのは早すぎます。まぢがえてはならないのは、この心は限りなく女性のものであるということ。だからこそ私は「人間」とは見えないこともない絶景であると思つのです。もしそれを言葉にするなら、そう、心と肉の完全なる一致、そしてそれが真に生きる姿のことです。

十これはあなたのためにやるのではない

愛において、私は純潔な花嫁

花嫁の声

……あなたがどんなにわたしを愛したとしても、それは、魂が知つてゐるあの愛とはちがう……これは、ほんとうにどうしようもできないこと。あなたがあなたであるからでなく、きつと私が私だからなのです。あなた以外の誰であつたとしてもなのです……

\*この続きは紙媒体の「えこし通信」創刊準備8号(無料)でご覧頂きたいと考えております。(えこし会広報室)